

塔

大村伸一

世界の終わりが近づいていた。

誰もがそれに気づいていたが、誰かにそれを伝えることはできなかった。

世界の終わりが近づくにつれて、おそらく、そのせいで、言葉が通じなくなっていたからだ。同じ言葉を使っている者同士、相手が何を言っているのか分からなくなってもう十年は経つだろうか。いや、一年を認識するためには、大勢の同胞と、コミュニケーションができなくてはならないのだから、もう、いつからそんなことになっているのかを知る方法はない。

それは、親子や夫婦や兄弟さえも、意思が通じなくなるということだ。そして、そんな状況が一時的なものでなく、もう二度と誰かと話をするなどできないのだと悟ると人は、沈黙するしかなくなる。近くにいても、それが気持ちの距離を意味しないと思知らされた時、人は誰からも離れて一人で暮らすことを選ぶようになった。

そして、今、誰もが、本当の世界の終わりの到来を感じていた。人の土地は急激に海に沈み、海に追われるように人は高い場所へと移動した。

その塔がいつ誰によって建てられたのかは分からなかった。何か記録があるのかもしれないが、記録に残された文字はすでに誰も読めず、もし読めたとしても、その意味を誰かに伝えることはできない。

塔は、昔の大きな都市をいくつも集めたほどの広さを持ち、あらゆる場所に扉があったので、誰でもどこからでも入ることができた。鍵はかかっていたいなかったのだ。

建物の壁に沿って、内側と外側に緩やかな階段が作られている。その階段をつたって、二階へ、三階へと、高くに登っていった。そして、建物は空へどこまでも続いていた。雲がなければ、塔はどこまでも空に昇り、青空に突き刺さる矢のように見えた。

海は、しかし、この塔にも及び、下の階から順番に水中に飲み込んで行った。おそらく、世界で最後に残ったのだろう人々は、諦めたように無言で、お互いに触れないように距離をおいて、

塔の壁にそって階段を登り続けた。水はとどまることがなかったので、人もとどまることはできなかった。人は、ただ少し足早に歩き、そこで水が追いつくまで少し、休むのだった。水は少しも慌てることなく、しかし着実に塔を蝕み、人に残された最後の世界を奪っていった。

どれだけ時間が経っただろうか。塔はまだ空に続いていた。人は、もう三人しか残っていなかった。水はゆっくりと塔を飲み込み、ときどき、人の踵に唾をつけるように、舐めたりした。

一人が言った。

「これでおわりだ」

すると、もう一人が答えた。

「もう、登るのはやめよう」

二人の言葉を聞いて、最後の一人が言った。

「言葉がわかる」

その声に、先の二人も言葉が通じていることに気づき、三人は同時に、こう叫んだ。

「よかった。話ができて」

そのとき、三人の目から流れ出した涙は、塔の先端までを一瞬でひたし、同時に、最後の三人を水中に沈めた。

世界は海中に沈んだ。